発行所
全大阪映画サークル協議会
〒530-0027 北区堂山町17－5 第ビル303
電話 06－6364－2142 FAX 06-6364-2184
郵便振替口座 00950－7-89220
購読料 半年 3600円 1年 6700円
定価 1部 200円

大阪映画サークル

全大阪映画サークル協議会機関紙

2026年1月15日号
第1567号
毎月2回
1日・15日発行

安楽死特区

そのエンディングに驚かされる 高橋伴明監督にしか撮れない映画

春岡勇二

『安楽死特区』。なかなかだ、という思い。高橋監督衝撃的な題名だが、この題にはこれまでも、自作と同名を聴いたとき、22年に公時期に他の監督が同じ題材開されて話題になった、早の作品を公表する、いわば川千絵監督の長編デビュー競作のような形になった作作『PLAN75』のような映画があるが、そこには必ず面かな、と思った。超高齢高橋監督だけのオリジナリ化社会を背景に、満75歳以ティと優れた表現があった。上の者は、安楽死を選ぶことができる制度が施行された近未来の日本が描かれ、主演の倍賞千恵子がその制度を利用しようかと悩む姿を軸に、制度に関わる若者たちの心情を交えて、"死を選ぶ権利"について考える内容になっていた。カンヌ国際映画祭では「ある視点」部門に出品され、カメラドール（新人監督賞）で次点になるなど国内外で一定の評価を得た作品だ。その内容が"安楽死特区"という言葉から端的に捉えられる意味合いと、ほとんどぴったり重なるから、同じような作品かなと推察したのも無理ないことだった。ただ、でも、待てよ、と思ったのもほんとだ。

監督が高橋伴明、となれば、数年前に同じような作品があってもきっと違うはず

脚本の丸山昇一と初となるタッグで

さらに本作のスタッフを見ると、脚本が丸山昇一とある。この名を見てすぐに思い出されるのは、テレビドラマの『探偵物語』（1979～80年）や、当人の映画脚本デビュー作となった『処刑遊戯』（1979年）など、松田優作主演のアクションもの。それに相米慎二監督のデビュー作『翔んだカップル』（1980年）に、大森一樹監督が吉川晃司を主演に撮った『すかんぴんウォーク』（1984年）に始まる3部作など、1970年代から80年代にかけて映画ファンの支持を受けた作品の数々。近年の作品には阪本順治監督が、石橋蓮司ほか、亡き原田芳雄ゆかりの俳優たちを集めて撮った『一度も撃ってません』（2020年）がある。月刊「シナリオ」誌、2026年2月号掲載の丸山昇一のインタビューによると、高橋監督とは、やはり1970年代末からの知り合いであったけれど、これまで丸山側がずっと監督との共働を願ってきたものの一度も実現せず、今回待望の初タッグとなったとのこと。ピンク映画出身の奇才であり、『TATTOO〈刺青〉あり』（1982年）、『愛の新世界』（1994年）などの代表作がある高橋監督。最近も2020年に渋谷で起こった女性ホームレス殺人事件を題材にした『夜明けまでバス停で』（2022年）や、1970年代の連続企業爆破事件に関与して指名手配されながら、およそ50年逃げきった桐島聡を追った『「桐島です」』（2028年）などを撮っている。その高橋監督が丸山昇一と組んで、安楽死を題材として扱いながら、どちらかといえばおとなしめの印象だった『PLAN75』のような作品を撮るわけがない。それは、観始めてしばらくして間違っていなかったことがわかった。

冒頭は少しとまどった。始まってすぐに映し出されるのは刑法第二〇二条（自殺関与及び同意殺人）の条文。そうか、今の日本で自身の安楽死を求める人がいて、医者や、あるいは誰か依頼された者が処置を行ったり手を貸したりした場合、この刑法に触れるわけだ。ここをどう超えるのかが、安

絶好調に人生低迷中なふたりの、
ちょっとおかしくて、ちょっと切なくなくもない旅が始まる――

Good Luck

監督・脚本:足立紳
佐野弘樹　天野はな
加藤紗希　篠田諒　剛力彩芽　板谷由夏
企画、プロデュース:釘宮慎広 森田真帆 プロデューサー:坂井正徳 足立晃子 撮影:依謙太 照明:福田裕佐

1月31日（土）よりロードショー！
Theater Seven 06-4862-7733
元町映画館
<1月30日（金）より>
●出町座　ほか